

# 日本英文学会中国四国支部 第60回大会プログラム

時：平成19年10月27日(土)・28日(日)

所：松山大学

(〒790-8578 松山市文京町4-2)

**日本英文学会中国四国支部事務局**

(〒739-8522 東広島市鏡山 1-2-3 広島大学文学部英文学研究室内)

TEL/FAX (082) 424-6683

## 第一日 10月27日(土) (参加受付 12:30より)

開会式・総会 (13:00～ 8号館4階 844教室)

	(司会)松山大学教授	吉田美津
開会の辞	日本英文学会中国四国支部会長	田中久男
挨拶	松山大学理事長・学長	森本三義
総会		

## 研究発表 (14:00～17:00)

第1室 (14:00～15:30 8号館4階 841教室)

- |                                                                                                  |               |       |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|-------|
|                                                                                                  | (司会)広島大学教授    | 中村裕英  |
| 1 『リア王』の2つのテキスト —— 検閲の跡を探る                                                                       | 日本大学大学院博士後期課程 | 藤木智子  |
| 2 Laurence Olivierの <i>film Hamlet</i> と<br>Peter Brookの <i>film King Lear</i> に見るShakespeareの存在 | 日本大学大学院博士後期課程 | 亦部美希  |
|                                                                                                  | (司会)元岐阜大学教授   | 西澤康夫  |
| 3 ハムレット批評とマーク・エイクンサイド博士                                                                          | 広島女学院大学准教授    | 五十嵐博久 |

第2室 (14:00～16:00 8号館4階 842教室)

- |                                                                                                 |                  |      |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|------|
|                                                                                                 | (司会)兵庫教育大学教授     | 大嶋浩  |
| 1 語りに潜む解釈 ——『ワイルドフェル・ホルの住人』の語りを巡って——                                                            | 日本大学非常勤講師        | 新井英夫 |
| 2 <i>Gulliver's Travels</i> における諷刺 ——“A Voyage to Lilliput”の場合——                                | 関西学院大学教授         | 森藤真成 |
|                                                                                                 | (司会)元徳島文理大学教授    | 岸本吉孝 |
| 3 ‘sensation novel’について<br>—— <i>The Woman in White</i> と <i>Lady Audley's Secret</i> の比較を通して—— | 広島女学院大学大学院博士後期課程 | 山内香澄 |
| 4 カーライルとカーライル夫人との関係                                                                             | 元ノートルダム清心女子大学教授  | 松藤亨  |

## 第3室 (14:00～15:30 8号館4階 843教室)

(司会)広島大学准教授 今 林 修

- 1 D. H. Lawrence の『チャトレイ夫人の恋人』に見られる方言  
—— Mellors の話す方言を中心に——

広島女学院大学非常勤講師 森 下 峯 子

(司会)広島修道大学教授 神 谷 正太郎

- 2 Conflict and Compromise in *Where Angels Fear to Tread*

広島女学院大学大学院博士後期課程 劉 輝 輝

- 3 “Tommy”による大戦回顧録 ——その可能性と問題点——

大阪市立大学非常勤講師 高 橋 章 夫

## 第4室 (14:00～15:00 8号館5階 855教室)

(司会)松山大学教授 伊 藤 詔 子

- 1 Henry James の *The American Scene*に見られる  
Jamesの祖国アメリカに対する否定的側面について

関西大学非常勤講師 橋 本 昇

- 2 Kill Your Sons: Reading Cormac McCarthy in light of Vietnam and Iraq

三重大学外国人教師 Taras A. Sak

## 第5室 (14:00～17:00 8号館5階 856教室)

(司会)大妻女子大学教授 松 村 恒

- 1 ラフカディオ・ハーンとハイ・カルチャー

一橋大学大学院博士課程 中 川 智 視

- 2 分裂する自我の霊

京都府立大学大学院博士後期課程 森 新 子

- 3 ハーンにとって物語とは何か

関東学院大学非常勤講師 光 畑 隆 行

(司会)京都府立大学名誉教授 榎 井 幹 生

- 4 ラフディオ・ハーンと色

明治大学ことわざ学研究所 松 村 有 美

- 5 ラフカディオ・ハーンとフランケンシュタイン —両者にみられるメッセージ—

岡山大学・ノートルダム清心女子大学・吉備国際大学非常勤講師、鳥根大学嘱託講師 伊野家 伸 一

- 6 世界文学からみたハーンの怪異小説

大妻女子大学教授 松 村 恒

特別講演 (17:00～18:00 8号館4階 844教室)

(司会)岡山大学教授 小 迫 勝

演題： 英文学史について

講師： 東京大学教授 高 橋 和 久

懇親会 (18:30～20:30)

(司会)松山大学教授 向 井 秀 忠

会場 「カルフル」(松山大学キャンパス内)

会費 5,000円

## 第二日 10月28日(日)

シンポジウム (10:00～13:00 8号館4階 844教室)

題目：「日系人文学と場所の感覚」 (司会・講師) 前 田 一 平

Karen Tei Yamashitaの作品にみる変容する「場所の感覚」 (講師) 吉 田 美 津

カズオ・イシグロの文学における日本性と普遍性 (講師) 野 崎 重 敦

カリフォルニア日系人社会とデザート・エグザイルの記憶 (講師) 加 藤 好 文

閉会式 (13:00～ 8号館4階 844教室)

(司会)松山大学准教授 細 川 美 苗

閉会の辞 日本英文学会中国四国支部副会長 小 迫 勝

## 日本英文学会中国四国支部学会誌審査編集委員会規定

平成 16 年 10 月 23 日一部改正

平成 17 年 10 月 29 日一部改正

平成 19 年 10 月 27 日一部改正

平成 20 年 11 月 1 日一部改正

学会誌名称は日本英文学会学会誌の名称に基づいて次のとおりとする

和名：『中国四国英文学研究』

英名：CHUGOKU-SHIKOKU STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

1. 審査編集委員会(以下「委員会」という)は、学会誌投稿論文の審査、採否決定及び編集にあたる。
2. 学会誌発行は年1回、12月、日本英文学会支部統合号において刊行する。編集日程は「日本英文学会中国四国支部学会誌投稿規定・要領」[編集事務の流れ]による。
3. 審査編集委員長(以下「委員長」という)の判断により、必要に応じて適宜委員会を開催する。
4. 委員会は、委員会が推薦し理事会において選出された英文学5名、英語学3名、米文学3名の合計11名の審査編集委員(以下「委員」という)によって構成される。各分野には責任者1名をおく。委員長の選任は、委員の互選による。
5. 委員の任期を2年とし、原則として再選は2期までとし、改選時、英文学2名程度、英語学1名程度、米文学1名程度を改選する。なお、任期は改選が決定した翌年の4月から2年間とする。
6. 学会誌編集事務局(以下「事務局」という)を、広島大学大学院文学研究科英語英文学研究室に置く。
7. 事務局は、投稿原稿を受け取り、投稿者の、一般会員か学生会員かの区別のみを示し、投稿者無記名の論文を委員長へ送付する。なお、審査を経て掲載されることとなった論文の執筆者名は事務局が記載し、本部へ送付する。
8. 委員長は、各分野の責任者に諮り、それぞれの投稿原稿に主査1名、副査1名を、割り当てる。また、投稿論文の内容によっては、委員長は会長と協議の上、委員以外の者を副査とすることができる。主査、副査間で掲載可否について意見が分かれた場合は、委員長または副委員長が判断する。
9. 主査、副査は「編集事務の流れ」に定められた時期までに査読結果を委員長へ報告する。

10. 委員長は査読結果をもととして委員会(メールでの会議を含む)を開き、次のような基準で判定をする。
  - A 無修正、或いは僅かな修正で掲載可。
  - B 書き換えを要請し、再審査し、合格すれば掲載可。
  - C 掲載不可。書き換え不可能で、時間をかけて書き直し、再投稿するよう促す。
11. 委員長は、委員会の判定結果を、事務局を通して投稿者に通知する。採用・不採用にかかわらず、投稿者には主査、副査のコメント等を添付する。採用になった投稿者は、論文修正に当たって、主査、副査のコメントを参考にする。
12. 判定結果B論文の最終審査は、「編集事務の流れ」で定められた時期までに終える。
13. 委員長は、採用論文全体の最終点検を行い、掲載順を示し、事務局へ送付する。
14. 事務局は、最終原稿を受け取り次第、完全原稿を10月1日までに本部事務局に送付する。
15. 校正は1回のみとし、執筆者が行う。訂正は、植字上の誤りに関するもののみとする。校正の送付と締め切り等日程は、本部事務局より示される。
16. 委員長は、委員会での投稿数を含む判定結果を、理事会に報告しなければならない。

## 平成19年度中間会計報告

※(1)～(8)の金額の内訳はそれぞれ次頁の(1)～(8)を参照のこと

### 歳入の部

項 目	予 算	中間会計
前年度繰越金	3,036,272	3,036,272
会費収入	1,794,000 (1)	550,000 (2)
広告収入	15,000 (3)	0 (4)
郵便貯金利子	4,556	4,556
日本英文学会より支部援助費	50,000	50,000
総 額	4,899,828	3,640,828

### 歳出の部

項 目	予 算	中間会計
開催校援助費	200,000	200,000 (5)
学会誌経費	1,042,000 (6)	0
特別講演講師謝金	100,000	0
〃 旅費	80,000	0
理事会弁当代	60,000	0
印刷費	300,000	0 (7)
事務費	300,000	21,060 (8)
郵便通信費	200,000	122,060
小 計	2,282,000	343,120
予備費	2,617,828	
残 金		3,297,708
総 額	4,899,828	3,640,828

(平成19年4月1日～平成19年9月30日)

- |                                                |                   |
|------------------------------------------------|-------------------|
| (1) 5,000円 × 333名(一般会員 417名 × 0.8) =           | 1,665,000円        |
| 3,000円 × 43名(学生会員 54名 × 0.8) =                 | 129,000円          |
| (2) 納入者数 103名                                  |                   |
| (3) 3件として算出(B5版半頁につき 5,000円)                   |                   |
| (4) 一頁1件、半頁2件 計20,000円納入予定                     |                   |
| (5) 松山大学へ                                      |                   |
| (6) 3,000円 × 333名(一般会員 417名 × 0.8) =           | 999,000円          |
| 1,000円 × 43名(学生会員 54名 × 0.8) =                 | 43,000円           |
| (7) 大会案内・プログラム・梗概の印刷料などの印刷料として<br>112,342円納入予定 |                   |
| (8) 第60回大会開催校準備委員及び副会長旅費<br>その他(事務用品など)        | 15,000円<br>6,060円 |



## 平成18年度決算報告

※(1)～(10)の金額の内訳はそれぞれ次頁の(1)～(10)を参照のこと

## 歳入の部

項 目	項 目	決 算
前年度繰越金	2,827,550	2,827,550
会費収入	1,895,000 (1)	2,075,000 (2)
広告収入	15,000 (3)	20,000 (4)
郵便貯金利子	109	109
日本英文学会より支部援助費	50,000	50,000
総 額	4,787,659	4,972,659

## 歳出の部

項 目		予 算	決 算
開催校援助費	A	200,000	200,000 (5)
学会誌経費		1,093,000 (6)	1,019,000 (7)
特別講演講師謝金		100,000	100,000 (8)
〃 旅費		80,000	55,790
理事会弁当代		60,000	45,000
印刷費		300,000	133,898
事務費		300,000	240,169
郵便通信費		200,000	142,530
小 計		2,333,000	1,936,387
予備費		B	2,454,659
繰越金			3,036,272
総 額	A+B	4,787,659	4,972,659

(平成18年4月1日～平成19年3月31日)

(1) 5,000円 × 346名(一般会員 433名 × 0.8) =	1,730,000円
3,000円 × 55名(学生会員 69名 × 0.8) =	165,000円
(2) 納入者数 369名(うち新会員 18名)	
(3) 3件(B5版半頁につき 5,000円)	
(4) 南雲堂(B5版一頁)	10,000円
音羽書房鶴見書店(B5版半頁)	5,000円
丸善広島(B5版半頁)	5,000円
(5) 安田女子大学へ	
(6) 3,000円 × 346名(一般会員 433名 × 0.8) =	1,038,000円
1,000円 × 55名(学生会員 69名 × 0.8) =	55,000円
(7) 3,000円 × 325名(一般会員) =	975,000円
1,000円 × 44名(学生会員) =	44,000円
(8) 斎藤 兆史 氏(東京大学大学院助教授)	
(9) 大会案内(600部)	10,500円
プログラム・研究発表・シンポジウム梗概(650部)	46,620円
封筒(1500枚)	19,950円
払込取扱票(4,000枚)	21,000円
ハガキ・ハガキ印刷料	35,828円
(10) 第59回大会開催校準備委員及び副会長旅費	10,000円
補佐員旅費・宿泊費	0円
補佐員謝金	100,000円
院生アルバイト料	48,000円
施設使用料(安田女子大学)	76,000円
その他(事務用品など)	6,169円

## 日本英文学会中国四国支部編集事務局 会計報告

(2006年10月～2007年9月)

## 【収入の部】

項目	費用(円)	備考
繰越金	898,714	
第3号論文投稿料	210,000	13人分
会費	1,019,000	日本英文学会中国四国支部より送金
		(2007年4月3日通帳へ入金)
受取利子	445	
計	2,128,159	

## 【支出の部】

項目	費用(円)	備考
『中国四国英文学研究』 第3号制作費他 (友野印刷株式会社)	1,124,480 (2007/1/19 に100万円 の支払い)	[内訳] 第3号制作費700部：1,064,000円 校正刷作成費4件：2,600円 立替金(校正発送費)：4,550円 消費税：53,330円
封入作業他 (友野印刷株式会社)	69,717 (2007/4/3 に残額 194,197円 の支払い)	[内訳] 学会誌発送用封筒700部：7,000円 封入作業610件：9,150円 立替金(発送費)607件：52,760円 消費税：807円
上記2件振込料	1,050	525円×2件
編集委員交通費などの経費	330,000	30,000円×11名
査読委員への謝金	5,000	編集委員以外5,000円×1名
郵送料	6,460	論文送付切手代, 簡易書留料他
雑費	3,709	建物貸付料, 編集委員会茶菓代
計	1,540,416	

収入 - 支出

2,128,159 - 1,540,416 = 587,743円 ⇒ 繰越金

## 日本英文学会中国四国支部学会誌投稿規定

平成 16 年 10 月 23 日一部改正

平成 17 年 10 月 29 日一部改正

平成 19 年 10 月 27 日一部改正

平成 20 年 11 月 1 日一部改正

学会誌名称は日本英文学会学会誌の名称に基づいて次のとおりとする

和名：『中国四国英文学研究』

英名：CHUGOKU-SHIKOKU STUDIES IN ENGLISH LITERATURE

1. 投稿資格は、過去1年以上本学会会員であること。
2. 投稿論文は、未発表の完成原稿で、1名につき1篇とする。
3. 原稿は、論文のみとし、書評は対象としない。
4. 原稿の採否は、委員会が厳正な審査(投稿者無記名)の上決定する。
5. 原稿の提出にあたっては、メールに添付して送ると同時に、打ち出し原稿(3部)を郵送することとする。原稿は、原則として返却しない。
6. 会誌を第5号よりPDF化し、ホームページで公開する予定である。なお、採用論文の著作権は、執筆者本人と日本英文学会中国四国支部に帰属するものとする。
7. 採用論文の執筆者用抜き刷りは20部とする。追加分については執筆者負担とする。追加分は10部(2,000円)単位とする。(学会本部委託の印刷所より送付)
8. 執筆分担金は、支部のみの会員に課す。これに該当する投稿者は、仕上がり1頁につき、一般会員は2,000円、大学院生は1,000円とする。(なお、統合号第2号からは執筆者分担金は廃止する。)
9. 締め切りは、毎年5月15日必着(週末の場合は翌月曜日)とする。
10. 日本英文学会中国四国支部の、下記のウェブ：[\(http://home.hiroshima-u.ac.jp/phoenix/chusi-eng/\)](http://home.hiroshima-u.ac.jp/phoenix/chusi-eng/)か『中国四国英文学研究』前年度号で投稿規定と投稿要領を熟読し、すべての項目を確認すること。
11. 郵送原稿の宛先は、日本英文学会中国四国支部学会誌編集事務局(広島大学大学院文学研究科英語英文学研究室)とする。

## 日本英文学会中国四国支部学会誌投稿要領

平成 16年 10月 23日一部改正

平成 17年 10月 29日一部改正

平成 19年 10月 27日一部改正

平成 20年 11月 1日一部改正

1. 論文は、和文でも、英文でも可能である。
  - ・長さの上限は、14,400字(スペースを含めない文字数)、(和文の場合、1行40字、1頁36行、英文の場合、1行80字、1頁36行で10枚)とする。上記の長さには本文・注および、論文末尾に加える引用文献を含む。フォーマットは、Word文書(.doc)でメールに添付して送信する。それと同時に、打ち出し原稿、氏名等を表示する1ページの別紙を各3部、宅急便もしくは簡易書簡で送ること(締切日必着)。メールの宛先は広島大学大学院文学研究科英語英文学研究室(elsjcs@hiroshima-u.ac.jp)とする。「件名」は「投稿論文」とする。
  - ・和文論文の投稿者は、上記別紙に題名と氏名を英語で付記し、これとは別に300語以内の英文アブストラクトを添える。(項目4参照)
2. 英語論文の投稿者は、各自の責任でネイティブチェックを受けることとする。和文論文の末尾に付する英文アブストラクトもこれにならう。
3. 論文の内容を示すキーワードを、英語論文の場合は英語で、和文論文は日本語で、論文本体の1ページ目の題目の下に5項目以内で添える。
4. 匿名審査のため、論文本体とアブストラクトには、投稿者氏名、謝辞、口頭発表の子細等は表記しない。電子ファイルで送る際、論文とは別にA4サイズ1枚のファイルを付け、題名、投稿者氏名、所属など(学生か、一般(非常勤講師を含む)かの区別、日本英文学会員か支部のみの会員かを含む)、連絡先、メールアドレスを明記する。
5. 注(Notes)が必要な場合は、本文末尾と引用文献(Works Cited)の間にまとめる。注は自動式ではなく手動式で入れる。
6. 引用文には、和訳を付けない。
7. 投稿論文には通しのページ番号を入れる。
8. 引用文献(Works Cited)として、本文に引用された著書、論文等のみを原稿の末尾にまとめる。引用と注の書式はMLA最新版に従うものとする。
9. 和文論文の場合、外国語の固有名詞はカタカナで表記し、初出の箇所、その名詞のあとに丸括弧付きで原綴りを付す。

## 日本英文学会中国四国支部規約

第一条 本会は、日本英文学会中国四国支部と称し、支部事務局を広島大学大学院文学研究科英語英文学研究室におく。

第二条 本会は、英語学、英米文学、英語教育学などの研究を行い、併せてその結果の発表を通し、会員相互間及び内外の学会との交流を図ることを目的とする。

第三条 本会は、第二条の目的を達成するため、支部大会(学会)の開催、学会誌の発行その他の事業を行う。

第四条 本会の会員は、第二条の主旨に賛同し、年額4,000円(学生2,000円)の支部会費を納入するものとする。ただし、2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。なおこの改正は平成20年度より施行する。

第五条 本会の運営は、理事会が行う。理事会は中国四国地区の大学(短期大学を含む)の英文科、英語科及び関連学科の代表者各一名をもって構成する。

第六条 本会には、次の役員をおく。役員任期は二年とし、再任を妨げない。

会長一名、副会長一名、会計監査二名。

1. 会長は、本会を代表し、会務を総轄する。

会長は、理事会の互選による。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があった場合には、その職務を代行する。

副会長は、会長の指名による。

3. 会計監査は、本会の会計状況を監査する。

会計監査は、理事会の互選による。

4. 学会誌審査編集に関わる役員は別に定める。(「学会誌審査編集委員会規定」参照)

### 第七条

1. 会員は、本会主催の行事に参加すると共に、支部大会において研究発表をすることができる。

2. 入会后一年未満の会員の研究発表は認められない。但し、支部会員の推挙紹介がある場合にはこの限りではない。

第八条 本会には、名誉会員をおくことができる。名誉会員の決定は、理事会で行い、総会で承認するものとする。

第九条 本会は、年一回の総会及び支部大会を開く。

### 第十条

1. 規約改正は、理事会が行い、総会の承認を得るものとする。

2. 本規約は、昭和54年10月21日より施行する。(昭和57年4月1日一部改正、平成13年4月1日一部改正、平成18年4月1日一部改正、平成19年10月27日一部改正)

### \*執筆者一覧(論文掲載順)

岩倉	國浩	(いわくら くにひろ)	広島大学名誉教授
松原	史典	(まつばら ふみのり)	高知大学教育学部准教授
楠木	佳子	(くすのき よしこ)	広島工業大学環境学部専任講師
高橋	章夫	(たかはし あきお)	大阪市立大学非常勤講師
奥野	みち子	(おくの みちこ)	大阪市立大学大学院文学研究科
本岡	亜沙子	(もとおか あさこ)	広島大学大学院文学研究科

### 投稿論文審査報告

平成20年(2008)度からの締め切りは、他の支部会雑誌との統合号(全国版)となるために、これまでよりもおよそ2ヵ月半遅い締め切りとなった。論文投稿総数は、9編でその内訳は、英文学分野5編、アメリカ文学分野2編、英語学分野2編であった。各論文を主査、副査、委員長が必要と判断した場合は、外部審査員を含めて、厳正に査読評価し、第一回編集委員会の慎重な審議の結果、残念ながら3編を今回は掲載不可とし、6編にコメントを付して投稿者に修正案を提示し、第二次審査に判断をゆだねることになった。修正後の第二次審査の結果、この6編を掲載可と判断した。(T. Y.)

## 編集後記

もともと自分が研究者になりたい、と望んだ理由には、学問自体が面白かっただけでなく、当時自分が学生であった頃の研究者、大学の先生方が毎日を本当に楽しそうに過ごしていたからというのもあったのではないかと思う。いいなあ、大学の先生は。「私は、ディケンズをやっている」とかなんとか言って、偉そうにして好きな本を読んでいればいいんだから……。あの頃は文学・語学研究が尊敬に値する高尚な学問だと少なくとも見なされていた。人数的にも活況を呈していた。振り返ってみると一種のバブル期だったのだ。そのせいもあって、いわば紛い物、偽者の研究者も多くいたように思う。今、自分自身が英文学・英語学の本物の楽しみを味わえる研究者かどうか、が本物の後進を養成できるかどうかにかかっているのかもしれない。合併号となった本号から、読者は、各支部の論文のレベルも比べることができるようになる。審査委員、査読委員としては、さらにその任が重くなったような気がする。昔のように可否だけを単純に振り分けていればいいような論文審査ではなくなった。もう威張っているだけではいられない。ならば、もしも「なるほど」、「そうか」、と興奮しながら読める論文に簡単に出会えないのなら、投稿者と共にそういうより質の高い論文が出来上がるようにお手伝いすることに喜びと楽しみを見出そうと思って……。否、思おうとして、いる。とまれ、編集委員、編集事務局のみなさん、そして、なによりも、論文を書き、読むことに情熱を捨てないでいてくれる人たちに、感謝。 (T. Y.)